

特集：大学教育にみるレジャー・レクリエーション

立教大学コミュニティ福祉学部・観光学部

沼澤 秀雄* 松尾 哲矢*

Professional Education on Leisure and Recreation Studies at Rikkyo University

Hideo NUMAZAWA* and Tetsuya MATSUO*

1. はじめに

立教大学においてはレジャー・レクリエーション関連科目を全学部の学生向けに2科目、コミュニティ福祉と観光学部学生向けに2科目展開している。全学生が履修できるものが、教養課程を見直した全学共通カリキュラムの総合A群に配置されている「レジャー・レクリエーション論」と「レジャー・レクリエーション論演習」であり、2学部の専門関連科目が「レクリエーション実践論」と「レクリエーション論」である。これらの科目の教育方針やカリキュラム構成を述べるまえに、立教大学でレジャー・レクリエーション教育を先駆けて取り組んでこられた石井允名誉教授の授業に触れたいと思う。

石井先生は1991年から4年間にわたって、必修であった保健体育講義や体育実技とは別に自由科目として「レジャー・レクリエーション概論」を実施していた。先生にとっては自分の担当コマとは別のサービプログラムとして展開していた授業であるが、当時、立教大学で教えるようになって間もなかった筆者が拝見した授業風景を回想しながら紹介してみたい。土曜日の2時限目に開設されたこの科目においては、授業というよりはクラブ活動といった雰囲気の中かで、教室もほとんど使用せずに長いすに自由に座りながら、ときには先生が「遊び」についての話をしたり、ときには校内でテント設営の練習をしたりといったアットホー

ムな授業が展開されていた。全員で買い置きのカップめんを食べながら午後も引き続いて活動してしまうこともたびたびで、とにかく学生がとても楽しそうに授業に取り組んでいたという印象が強く残っている。履修している学生は課外活動でキリスト教関連のチャペル団体に所属し、聖歌隊やオーケストラで楽器を演奏している学生、日曜日に子供たちと接している学生などを中心に10～30名であった。また、この授業では年間2～3回の合宿やキャンプを行って、希望者には「キャンプ指導員」の資格を与えていた。石井先生が退官なさるときの最終講義には100名を超す授業のOBやOGが集まったことから、学生がこの授業の魅力を強く感じていたことがわかった。この自由科目「レジャー・レクリエーション概論」の意思が現在のレジャー・レクリエーション関連科目の展開に引継がれることとなった。

2. キリスト教に基づく教育とリベラルアーツ

立教大学はキリスト教教育の理念をさまざまな形で制度化してきた。入学式、卒業式などに代表されるキリスト教の礼拝の実施、全学に対するキリスト教倫理の開講、文学部におけるキリスト教学科の存在、さらに、キリスト教教育研究所の設置というようにキリスト教教育として特色ある大学運営を行ってきた。このことは大学における理念がキリスト教教育に根ざすも

* 立教大学コミュニティ福祉学部 College of Community and Human Services, Rikkyo University

のであり、カリキュラムについてもその理念が包括的に具現化されているとあってよいだろう。1997年に刊行された立教大学白書によれば、教育の基本方針として以下の諸点を挙げている。

- 1) 人間は歴史的過程で自己実現する存在である。
このことは社会的階層価値を離れて人間一人一人の尊厳を確信することであり、すべての人間の自由と平等を尊重することを意味する。
- 2) 人間が歴史の中で自己実現すると言うことは、同時に社会的人間を確立していくことである。
このことは一人一人の自主性が尊重されることであり、同時に他者に対する寛容と社会的責任が要求されることでもある。
- 3) 人間存在の意味はある特定の民族や階級によって閉鎖的に規定されているのではなく、神の前において全ての者は平等な関係の中で存在する。
- 4) 人間は社会的存在として、社会的責任を履行することが要求されている。とりわけ、社会的弱者に対する思いやりはキリスト教理念の原点である。
- 5) 以上の教育方針が追求されていくためには一人一人が他者に対する優しさと自己に対する厳しさを確立する必要がある、同時に理性的営みを尊重し、実行力と情緒豊かな感性を兼ね備えた人間でなくてはならない。

このようなキリスト教教育の理念は教育的配慮として、すべてのカリキュラムの基本として存在する。この配慮はそれぞれが時間の経過と共に社会的に成長するというキリスト教教育の重要な理念の具体化でもある。

本学がキリスト教教育に根ざした教育を標榜している限り、学問や実学的養成の前に人間としての基本的あり方を問う教育を行わなければならない。その教育は、全人教育を旨とするリベラルアーツにその教育理念が見いだされる。リベラルアーツの教育は学生一人一人の個性を尊重し、社会人としての責任を学び、それぞれが運命的に出会った文化・社会を大切にしつつ、同時にそれらを越えうる国際性を涵養する教育である。これらの教育理念に従って、全学部がそれぞれ責任を持って教養教育を行うべく、全学共通カリキュラムを展開している。

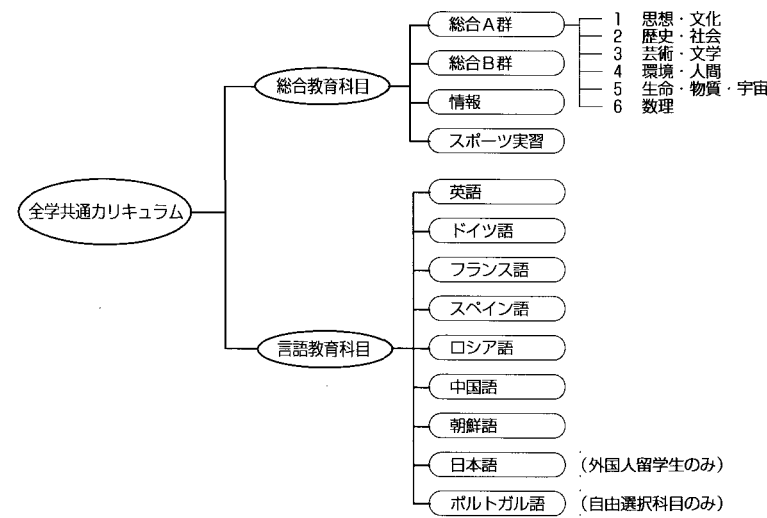
レジャー・レクリエーション関連科目についても、

レジャーやレクリエーションが人間の生のあり方に深く根ざしている領域であることから、キリスト教教育とリベラルアーツ教育の達成のために、重要なカリキュラムの一つとして認識されるようになってきたと考えることができる。実際にこれらの授業ではチャペル関係の団体を活動する学生、福祉関係のサークルに入る学生や卒業後、カウンセリングの仕事の中でこの科目の専門性を生かしている学生などを大勢輩出している。

3. 全学共通カリキュラム

一般教育課程を担う組織として、1994年12月に全学共通カリキュラムが発足した。この全学にまたがる組織が生まれる契機になったのは1991年の大学設置基準の大綱化である。全学共通カリキュラム運営センターの寺崎昌男初代センター部長はキリスト教に基づく建学の精神、リベラルアーツ教育を継承することをめざし、戦後日本の大学教養教育カリキュラム変遷の考察から、今後の立教の学部教育の目標は「教養を持つ専門人の育成」から「専門性に支えられた新しい教養人の育成」へと転換させるべきであると提言した。その理念と目標の実現をめざして、総合教育科目と言語教育科目が設置された。総合教育科目は単に専門分野の能力を伸ばすだけでなく、むしろ専門性を具体的市民社会生活に生かす役割を担い、世界を理解しつつ生の可能性を拓く、人間にとって不可欠な見識と能力を育てる全人格的学問として展開される。その設置科目は、(1)思想・文化 (2)歴史・社会 (3)芸術・文学 (4)環境・人間 (5)生命・物質・宇宙 (6)数理の6カテゴリーから分類される総合A群、時代に即応した問題やテーマのもとに複数の教員が担当する学際的な総合B群のほか、情報とスポーツ実習の4群からなる。本学の特徴はレジャー・レクリエーション関連科目については総合A群の思想・文化のカテゴリーの中に設置されていることである。学生が科目を履修するときに参考にする履修要項を見ると、思想・文化については「知性の鍛練は、大学で学ぶ者にとって欠かすことはできない。このカテゴリーでは、本学の建学の精神であるキリスト教の思想や、古今東西の哲学思想、またさまざまな地域の文化・社会、さらにはレジャー・レクリエーションの知、身体の知などを学びながら、今日の多様な価値の時代における私たちの自己理解、ものの見方、生き方を考え、鍛えなおしていく。」という記載が在る。このことは、本学のカリキュラムはレジャー・レクリ

全学共通カリキュラム



1 思想・文化

科目名	単位
人権とキリスト教	2
聖書の思想と人間観	2
キリスト教思想の展開	2
キリスト教と諸思想	2
思索の方法 1	2
思索の方法 2	2
思索の方法 3	2
思索の方法 4	2
思索の方法 5	2
思索の方法 6	2
現代の思想状況 1	2
現代の思想状況 2	2
現代の思想状況 3	2
文化人類学の世界	2
レジャー・レクリエーション論	2
スポーツ文化論	2
キリスト教の知演習 1	2
キリスト教の知演習 2	2
キリスト教の知演習 3	2
哲学思想演習 1	2
哲学思想演習 2	2
哲学思想演習 3	2
哲学思想演習 4	2
文化人類学演習	2
レジャー・レクリエーション論	2

図 1. 全学共通カリキュラムと思想・文化カテゴリーの科目名

エーションを身体活動としてのみ捉えているのではなく、思想や文化という精神的な知という側面からも学んでいくものであることを示している。さらにはこのカテゴリーの中にキリスト教の知演習、哲学思想演習、文化人類学演習と並んでレジャー・レクリエーション論演習を配置して、学生の討議やその領域のフィールドでの活動を評価するカリキュラムとなっている。

4. コミュニティ福祉、観光学部における 専門教育科目

本学は1998年4月に「コミュニティ福祉学部」と「観光学部」を武蔵野新座キャンパスに開設した。立教がめざす全人教育を実現するために両学部は「ホスピタリティ」と「コミュニティ」というキーワードでカリキュラムを展開している。コミュニティ福祉学部は「人間の尊厳のために」(Hominis Dignitati) という理念を掲げ、地域社会への貢献と共生を強く意識した教育と研究を目的としており、コミュニティにおけるヒューマンサービスを軸により深く広い研究を志向し、それによって新しい福祉学の構築を目指そうとする学部である。スポーツ系の教員は全員この学部所属している。一方、観光学部は観光という社会現象を産業としてのみならず、国際的な文化交流や相互理解をはじめ、地理学、経済学、心理学、社会学など様々な学術的見地から捉え、真に豊かな観光文化を築くた

めの探求を進めていく学部として、社会学部観光学科を改組・独立させ、日本で初めて開設した。両学部の教育と研究は学際的であることが共通しているため、カリキュラムは全学共通カリキュラムのほかに専門関連科目を設けている。1～4年次設定科目である専門関連科目は社会教育・体育・文化・人間学・宗教学など幅広い分野から福祉と観光の接点を模索することを目的とした科目であり、人間の基礎的素養を養う科目群である。「レクリエーション論」と「レクリエーション実践論」はこの科目群で展開されており、レクリエーションの基礎理論、レクリエーション支援やグループダイナミクスの獲得など福祉や観光のフィールドに役立つ知識と技術を修得するものとなっている。しかしながら、開設して2年ということもあり、卒業生もまだ出しておらず、科目の評価や検証は充分に行われておらず、試行錯誤のなかで授業を行っている段階である。

5. さいごに

本学におけるレジャー・レクリエーション教育をより充実したものにするためには、次のようなことが重要になるだろうと思われる。

- (1) レジャー・レクリエーションに関する概論や実践論にとどまらず「レジャー・レクリエーションの経済学」や「レジャー・レクリエーションの社会学」など多角的かつ専門的な科目を設けて、より深くレジャー・

